

梅

“物が見える”ということをよく聞く、どういうことかと言うと一つ一つ知識がふえるということだと思ふ。梅林に毎日行っていると、あれ、この花の名札はおかしいぞ、咲く時期が違うといったことを発見する。大体、同じ種の花は同じ時期に咲くことが判ってくる。当然、よく調べると、例えば、しべの長短、花弁のかかえこみ、そりかえり、波打、ガクの色の違い等々を観察すると違いがよくわかる。このようにして品種を判別する。ところが、よくあることだが、固定観念を持って物事をとらえては駄目だ。例えば梅の花は五弁だということ、実際は六弁あり、八弁あり、中には一枝に一重と八重が咲いたりする。ある時、八重緑ガクと名札にあるのに、その枝を観察すると一重と八重が咲いており、樹形は人文様で素晴らしい木だったので、太閤梅と名付けたらと提案したことがある。枝でも緑の枝に黄色い筋が入れば筋入りとなり、たとえば筋入り茶ガクという品種になります。珍しい品種で華農玉蝶という品種があります。

これは梅学会の人たちが中国と文化交流した中で手に入れたもので、花の中に玉ができ、それが開いて蝶になるということです。この木は大阪城梅林の出店で入手できるようになりました。また、花弁が退化してしべだけの花、てっけん梅や白色と桃色の咲き分けする思いのままや花弁が一枚一枚咲き分ける日月梅や枝が線香の煙のようにくねくね曲がった香篆梅や地に這う臥龍梅、早大山岳会がエレベストのふもとの村で井戸を掘り、そのお礼にもらった黄色の花の咲く黄金梅等々、現在現存する品種は350種位あるようです。私も調査して328種類ありましたが昔口頭で言い伝えられたためか例えばスイシンバイは水心梅・酔心梅といったように表記されるようになり、重複しているやに思われます。寿命はおおよそ60年くらい、300年以上の木もありますが、まれで見る姿は哀れなものです。歴史的には遣唐使のころに中国からはいつてきたと古文書に書かれておりますが、弥生時代の遺跡から梅の種が見つかっており、そのころに伝わったかもしれません。